

第15回日本語大賞

特定非営利活動法人日本語検定委員会



一般の部 優秀賞 受賞作品

『推しの教え』

福岡県

翠玉

推しの教え

翠玉（すいぎよく）

楽しい時も、悲しい時も、いつも側にいてくれたのは大好きな母だった。ふくよかで穏やかな存在も、心が安らぐ優しさも。

そう、私の推しは、母。

高校に入学するまで、私は大きな困難や挫折を感じたことはほとんどなかった。成績は常に学年上位で、高校は県内有数の進学校へ。努力をすれば、何でも乗り越えられていた。

しかし、高校に入学して早々、私の状況は一変した。一番仲良くなった友人から、ありもしない嘘を他の友人たちに言いふらされ、私はクラスで孤立することになった。こちらが聞こえるように、嫌味を大声で言われることもしばしば。

初めて、いじめというものを経験した。教室へ行くことが怖くなり、保健室にいる時間が増えた。本当に、本当に辛かった。けれど心配させたくなくて、母には話せなかった。思い出すと、今でも自然と涙が溢れてくる。

しかし、子供思いの母のこと。すぐに異変に気付いたのだろう。「学校はどう？」と聞かれる回数が増えた。当時の私には母の気持ちを考える余裕はなく、自分のいる耐え難い状況で日々を過ごすのが精一杯だった。この先の楽しい学校生活は想像できず、ただひたすら闇の中をとぼとぼと歩いているだけだった。母に常に反発し、汚い言葉も口にした。家具や壁にあたり、大きな音を立てることも少なくなかった。苛立つて床に投げつけたウォークマンは、壊れてしまった。

次第に早退の回数が増し、私は学校へ行けなくなった。ずっと家にいて不機嫌な私に、一体何が起きているのか。全く分からず、母はとて不安だっただろう。それでも、無理に学校へ行くように言われることはなかった。時には「買物物に行つてランチしない？」と尋ねてくれた。口には出さなかったが、その頃の私は本気で退学を考えていた。

しばらくして母から「県外の学校に転入する？」と言われ、一緒に公的機関へ相談に行った。少し離れた場所へ、電車で。駅に降り立つと、のどかな風景が広がっていた。

話をしてくれた担当者は、こちらの状況を深くは聞かず、いくつかの選択肢を説明してくれた。今の状況からの抜け道もあるのだと知ることができた日だった。

転入するつもりで過ごしながらも、精神的に暗い日々は続いた。学校へは行きたくないが、授業に出席しなければ単位が取れず、転入さえできなくなる。

一方で、進学校だったため、ここを卒業して大学に行きたいという気持ちも少し残っていた。今まで、何でも乗り越えられてきたから、なんとか頑張りたいという思いもあった。

そして葛藤を重ねた末、私はそのまま高校に残る決意をした。乗り越えたかった。

その後、徐々にはあるが、教室へ行けるようになった。友人たちとも話せるようになり、二年生ではクラス替えがあり、楽しく過ごすことができた。

だが、勉強においては別だった。四歳から英会話教室に通っていた私は、将来は外交官になりたいとずっと思っていた。志望大学も小学生の頃から決まっていた、高校でも勉学に励むつもりだった。

しかし、入学早々辛い状況に陥り勉強をしなくなった私は、二年生になってからも授業は憂鬱だった。中学生の頃まで好きだった勉強が、大嫌いになった。テストで初めて〇点を取

った。先生の目の前の席で、堂々と寝ることもあった。

「挫折できて良かったね。」

ある日、何気ない会話の中で、母が私にそう言った。

「今まで何でもできていたから、できない人の気持ちも分かることができて良かったね。」
私は、はっとすると同時に、その言葉に救われた。それまでマイナスだと思っていたことを、プラスにとらえてくれた母。多くは語らなかつたけれど、しっかりと寄り添ってくれていた。心があたたかくなった。そして、これから勉強すれば、まだ間に合うかもしれないと思った。

その日から、私は気持ちを改め必死で勉強をするようになった。その結果、ある教科では、全国模試で県内三十位以内に入ることができた。再び、勉強が楽しくなった。勉強しなさいと言われたわけではないけれど、頑張れたのは間違いなく母のおかげ。母と私の、チームプレー。

その後、私は無事に高校を卒業し、志望大学へ入学した。また一つ、乗り越えられたものが増えた。

とにかく辛かった、高校一年生の日々。まともに母と向き合おうとせず、無視をしたり、時には母を傷つける言葉も口にした。そんな私に、母は何度か手紙を書いて机の上に置いてくれていた。色々な思いがこもった言葉たち。今でももちろん、しっかりと箱の中にしまっている。

言葉は凶器にもなるし、武器にもなる。友人の言葉で傷つけられたけれど、母の言葉で救われた。私が生まれてから今まで、常に私の背中を押し、様々なことを教えてくれた母。甘えているようだが、これからもずっと私の推しでいてくれれば良いなど、切に願う。心が離れた期間はあつたけれど、私だってこれからもずっと母を推していく。目には見えない、大きなうちわを振りながら。

辞書によると、挫折の「挫」は、くじけたり、弱めたりというマイナスの意味を持つのだそう。

しかし、私にとつては違う。隣に「座」って「手」を差し伸べる、母の存在のようなあたたかな意味も持つのだと思う。

「マイナスの裏にはプラスがある」

私を推す、私の推し、大好きな母が教えてくれたこと。